

2022年度(令和4年度)学校評価自己評価表

神辺西中学校区	校番 74	福山市立神辺小学校
最終更新日		2023年(令和5年)2月1日

I 福山市

<p>ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。</p> <p>ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。</p>

II 中学校区

<p>前年度学校関係者評価の主な内容</p> <p>1.児童が学び方の経験を活かしたカリキュラム編成や学級単位にとられない授業形態等を工夫する。</p> <p>2.PDCA サイクルをもとに、児童生徒の学びや活動を充実させ、改善を図る取組を継続していく。</p>	<p>児童生徒の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学びの伸びを把握する調査では、現状学年のレベルに達していない児童がいた。 • 小中ともに児童生徒が自ら動き、生活をよりよくしようとしている。 • 「体力づくりに取り組んでいる」肯定的解答85%。新体力テストは2021年度、接触をさせて実施。県平均を越えた割合11%。 	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)</p> <p>めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)</p> <p>中学校区として統一した取組等</p>	<p>スキル：知識・技能 思考力・判断力・表現力 学びに向かう力 倫理観：思いやり</p> <p>知：自分の考えを持ち伝え合う子 徳：人の気持ちがわかり協力できる子 体：健康でねばり強い子</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「子ども主体の学び」全教室展開の実現を目指した授業改善の継続 • 児童生徒による生徒指導(生活のきまり)の見直しの継続 • 神辺西中学校区における「21世紀スキル&倫理観」の評価規準による個に応じた支援の継続
---	--	--	---

III 自校

<p>ミッション</p> <p>伝統を現在に生かし、未来を生き抜く人を育てる。</p>	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)</p>	<p>知識・技能</p>	<p>思考力・判断力・表現力</p>	<p>学びに向かう力</p>
<p>学校教育目標</p> <p>ひとりひとりの命を生かし 育てる教育の実現</p>	<p>めざす子ども像</p>	<p>既習事項と新たな知識・技能を関連付け、思考・判断・表現の場で活用できる知識・技能として定着している。</p>	<p>課題解決のために必要な情報を収集し、比較・分類したり関連付けたりして、筋道立てて考え、表現している。</p>	<p>既存の知識と関連付け、自ら課題を見つけ選択するとともに、学習の仕方や進め方を振り返り、次の学習や生活に生かそうとしている。</p>
<p>現状</p> <p><児童生徒></p> <ul style="list-style-type: none"> • 自分や友だちのためになることを考えて実行できている」と自己評価する児童は全体の93%であり、増加している。自分の周囲に対してだけでなく、学校や地域に貢献しようとする気持ちが育っている。更なる実践力育成のため、PDCA サイクルに基づき、活動の改善を図る機会を増やす必要がある。 <p><授業></p> <ul style="list-style-type: none"> • 児童が自己の学力を伸ばしていけるように、教員が、児童一人一人の伸びを見取る評価力を高めていく必要がある。 • 児童の学びに向かう姿には、個人差があり、児童の発言に対して柔軟に対応し、学びを繋げていく教師のファシリテーター力を高めていく必要がある。 	<p>テーマ</p> <p>研究 内容等</p> <p>めざす授業の姿</p>	<p>自ら学び続ける子どもの姿を目指した仕組み</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 児童が自ら学びをデザインする <ul style="list-style-type: none"> • 児童が自分の関心や習得の段階に応じて課題や学習方法を考え、選択する。 • 児童自身が学びのプロセスに目を向け、学び方を修正したり、自己の伸びを実感したりできる振り返り 2 子どもたちの多様な学びを尊重した授業 <ul style="list-style-type: none"> • 教科・学年を越えた学びのカリキュラム • 総合的な学習の時間の単元開発(縦割りでの学び、教科・興味発、個人テーマ) • 児童の学びの過程に即した評価方法の見直し及び教員の評価力向上 <ul style="list-style-type: none"> • 児童が主体的に取り組み、学び楽しさを味わうことのできる授業 • 身に付けた既習事項を活用して、新たな課題を解決することのできる授業 • 友だちと共に学ぶよさを実感できる授業 		

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立神辺小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力を入 れ達成 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力を入 れ達成 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
3	自己の学び をデザイン できる児童 の育成	★	継 続	児童自身が学び のプロセスに目 を向け、学び方を 修正したり、自己 の学びを実感し たりできる振り 返りを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 単元の前で自己の学びの段階や伸びを記録し、比較したり、他単元及び他教科、生活等とつなげたりできる振り返り方法やシートを工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童アンケートを通して、自己の学びについての満足度を90%以上にする。 教員の振り返りや児童の具体的な伸びの姿を、学期に1回以上交流し、課題の取組ができているか前期・後期で学年間で分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童アンケートの肯定的回答は、①「学習課題を決めたり、選択したりして学習を進める」83.4%、②「考えたことを文や言葉で表し振り返る」83.3%という結果である。8割の児童が肯定的に自己の学びを捉えているものの、目標には届いていない。 授業づくり研修や校内授業研を行い、本校の授業づくりの重点を協議・共有した。各研修の中で、「書くこ考える」授業をつくり、振り返る。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこ考える」授業を目指し、その重点や流れを教員及び児童で共有することで、児童が学び方や自己の学びを自覚できるようにする。 【授業の流れ】 ①課題発見・見通し ②書く ③学び合い (比較・関連づけ等) ④再整理―書く 「何を考え、何を書くか」「児童はいかに学んでいたか」の視点で「書くこ考える」授業をつくり、振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童アンケートの肯定的回答は、①85%、②84.5%という結果である。8割の児童が肯定的に自己の学びを捉えており、前回より上向いているものの、目標には届いていない。 「書くこ考える」授業の視点で授業づくりを進め、自身の実践を振り返る機会を多く設けた。教員の自己評価では、85%が実施できたと考えられるものの、児童の姿としては「書くこ考える」姿に課題があると捉えている。 	4	3	4	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこ考える」授業の充実のために次の2点に取り組む。 ①【授業の流れ】に沿った授業の展開、及び授業の見直しを続ける。「何を考え、書くのか」を明らかにして授業を構想する。 ②「振り返り」には、学習内容の整理+自己の学びの自覚の2つの視点があることを踏まえ、「何を」「どう」振り返るか、学年や学校で共有する。単元レベル、1時間レベルで何を振り返るかを明らかにして授業を構想する。
1			新 規	子どもたちの多 様な学びを尊重 し、教科・学年を 越えた学びのカ リキュラムを開 発する。	<ul style="list-style-type: none"> 「認知の仕組み」をもとに、教員が、児童の具体的な姿から「学び」について話し合う場を設定する。そして、それをもとに、4月に作成したカリキュラムの修正を重ねていく。 	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラムマップの改善を継続する。 教員の振り返りや具体的な取組事例及び児童の学びの姿を、学期に1回以上交流し、成果と課題を挙げる。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の学びや授業づくりを協議する研修等を通して、日々カリキュラムマップの検討を行っている。学習内容の関連や実態を踏まえ検討した。 「学びの伸びを把握する調査」では、「学び方」に対する児童の意識の低さが見られた。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこ考える」授業を行い、自身の学びをふりかえる場面を設けることで、児童が学びを実感できることを目指す。 カリキュラムマップの見直しの際、入れ替えや複合の理由を欄外に記入し、検討しやすくする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこ考える」授業を実践し、学びを振り返る場面を設けた。一方で、何を振り返らせるかの共有が不十分であること、単元レベル、1時間レベルで何を振り返るかという視点が不十分であることといった問題が見られる。 	4	3	3	
				基礎基本の学力 の定着を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 帯タイムを活用し、自ら復習や予習ができる取組を行う。 学力テストの分析を行い、授業改善ポイントを見出す。 	<ul style="list-style-type: none"> 学びの伸びを把握する調査における回答率が前年度を上回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学力調査の結果、同一児童での前年度との回答率を比較すると、わずかに市平均との差が縮まっており、伸びが見られる。しかし算数の問題、そして無回答率が高いという課題が大きい。 帯タイムの時間を基礎的内容の定着の時間とし、その使い方や内容の見直しを行った。 	3	2	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこ考える」授業の実現により、自分の考えを書き整理するとともに、学力調査分析から見出した各教科の重点ポイントや、各学年の取組を実施する。 帯タイムの内容を精選し、短時間で集中する学習の習慣化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員アンケートの結果、帯タイムを活用した基礎的な知識・技能の繰り返し学習は96%の職員が成果を感じている。一方で、重点単元を意識した実施は31%の職員が不十分と考える。分析したポイントを意識し授業改善に繋げるため、学力テストの問題を活用した授業を計画し、全職員で実施している。 	3	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 「神辺チャレンジタイム」として学力テストの問題を活用した授業を計画、実施することで、学力テストの分析を生かし、授業改善のポイントを全職員で共有しながら実施する。

3 1	自己の学びをデザインできる児童の育成	★ 継続	児童が、学校をよりよくするため行動できる実行力を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動において、何が学校のためになるかを児童が話し合い、企画・実践できる場を設ける。 「人のために動く活動」「人の役に立つ活動」など委員会、当番活動、係活動などやる気をもたせる学級経営の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童による振り返りに重きをおき、児童の具体的な伸びの姿を低中高学年で認め合う場を2回以上にする。 一人一役当番や自ら考え、選択した行動により、人のために動くことができたとして自己評価できる児童を85%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自ら考え、選択した行動により、人のために動くことができたとして自己評価できる児童は89%であった。 栽培委員会では希望者で花を植える活動、美化委員会では掃除を活性化させる活動をするなど、児童が企画した活動の実施をすすめている。 学級では、児童が行事に向けて頑張りたいたいことを掲示し目標を意識させたり、学級のためになる仕事を自分で考えたりと、よりよい学校生活にするためにできることを自分たちで考えている。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動において、運動会で行ったように、異学年が互いの活動にふれ、よいところを認め合う機会を設けることで、自身を高める機会としたい。 それぞれの委員会において、常時活動に加え行える取組を企画し、実施するなど、児童が自ら考え主体的に行動する機会を増やしていきたい。 掃除など、どの学年でも取り組めることを目標として設定し、実施・振り返りをする中で、人のために行動できる児童を育成していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 人のために動くことができたとして自己評価することができた児童は90%である。 児童が、学校のためになることを話し合う機会を設け、それによりできたことを肯定的評価することを教師が意識することができた。 異学年で認め合う活動を年に2回設けることができた。児童は、見つけたよいところを自分にも生かそうとすることができた。 いいところを見つけに行ったり、児童の頑張りを通して保護者に伝えたりと各学年が意識をもって行えた。 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 児童が周りのために行動できるよう、教師が手本を見せたり、一緒に行ったりする。 行事等で、児童の思いが反映されるよう、児童が案を出す場を増やす。 それぞれの取組を共有し、学級経営に生かす。 今後も異学年交流の場を設定する。
3	自己の学びをデザインできる児童の育成	★ 継続	積極的に運動に親しもうとする。 目的に合わせて目標を設定し、体力向上ができる。	<ul style="list-style-type: none"> 全校で運動に親しむ時間を設定するなど、運動について児童同士が交流する機会を設ける。 体育委員会や教員が運動例を示すなど、児童が自分で運動を選べる環境を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が活動できる体育的イベントを学期に1回以上実施する。 「運動に取り組んでいる」児童の割合を85%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 新体力テストを全学年で取り組み、体力向上を図った。また、水泳指導を行い、感染対策を講じながら、学級単位での学習を行うことができた。2学期は運動会を実施し、運動を通して児童同士で協力したり、助け合ったりする姿が見られた。 運動に取り組んでいる児童は87%であった。体育委員会がマイプランで実施できる運動例を1学期に2回、提案することができた。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ウォークラリーが実施できなかったため、2・3学期で体育的イベントを多数実施していく。特に、異学年で交流できるものを検討する。また、新体力テストでの課題であった柔軟性と跳躍力に特化した動きを取り入れた3分間サーキット運動を取り入れていく。 運動例の提示を引き続き行い、マイプランなどで運動した成果が分かるような取組を体育委員会を中心に考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 2学期は運動会を実施し、全学年と関わりながら運動に親しむことができた。また、ドッジボール大会、大縄大会を実施することができた。しかし、異学年間の交流が薄いことが課題である。 また3学期よりサーキット運動を取り入れ、進んで体力向上を図る姿が見られた。 新体力テストの項目について毎月重点項目を決め、マイプランや体育の授業で運動に取り組んだ。月末には記録測定会を実施し、記録の伸びを測ることができるようにした。 	4	3	4	<ul style="list-style-type: none"> 体育的イベントを学期に1回は実施を継続し、運動に親しむ機会の充実を図る。また、休憩時間の外遊びを促す取組を実施していく。 サーキット運動や新体力テストの重点項目に毎月取り組むことを継続し、体力の向上を図る。

<p>3 児童の教育環境をデザインする取り組みを推進する。</p>	<p>継続</p>	<p>小中一貫教育の推進を図り、その取組を検証し、情報発信する。</p> <p>教職員一人一人の働き方に対する意識の醸成を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 小中合同研修会を年間2回以上、各部の主任・主事による連携を3回以上行う。 幼保小合同研修会を年間2回以上実施する。 超過勤務45時間以内を目指し、教職員の主体性を尊重した自己管理を行う。 行事及び準備時間の精選や教科横断的な単元づくりを通して、子どものために学びづくりに向けた場や時間を確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> 小中合同研修会で話し合った内容を精選し、特に生活のきまりを工夫改善する。 特別支援教育の視点に「授業参観や協議を行い、日々の実践に生かす。 学年単位で、45時間以内を意識し、各主任が定期的に声をかけることを100%にする。 職員アンケートにおいて、「子どもたちのために使える時間を確保できている。」と肯定的評価する職員を90%以上にする。 	<p>小中合同研修会では、不登校・長期欠席児童生徒についての実態把握とともに、講師を招いて、取組実践例について研修を深めた。</p> <p>特別支援学級の授業研修会を行い、個に応じた授業づくりについて学んだ。</p> <p>学年単位で45時間以内を意識し、声かけを行った教職員は82.8%となった。また、年休を取ろうDAYや長期休業日の積極的な年休取得を行った。</p> <p>行事及び準備の精選や単元づくりを工夫しているものの、子どものために使える時間を確保できている職員は68.6%であった。</p>	<p>3 3</p>	<ul style="list-style-type: none"> 不登校・長期欠席児童生徒を減らすためにも学力向上に向けて、小中の授業を見合う研修を行い、自分の考えをもつためにも書く力を育てる授業づくりに取り組む。 幼保小との連携を図るために、各保育所、幼稚園へ職員が出向き、実態把握を行う。また、幼保職員と小学校職員が協力して、絵本をもとにした教材研究を進めていきたい。 各主任が率先して、声かけを行い、仕事の時間配分を計画的に行っていく。 組織的な取組を進めるために推進計画を作成することで、業務改善と人材育成につないでいく。また、下校時刻の工夫や校務分掌及び学年事務における役割を再度見直し、見通しを持って取り組んでいく。 	<ul style="list-style-type: none"> 小中合同研修会を2回行うことができた。不登校・長期欠席児童生徒の減少のためには学力向上が欠かせないと話し合うことができた。小学校の授業を中学校の先生方に見てもらい、小学校段階で必要な力や中学校に向けての生活指導など交流することができた。 幼保小との連携も2回行うことができた。2回目は不登校傾向の園児などについてどのように対応していくとよいかなど意見交換することができた。 学年単位で、45時間以内を意識し、各主任が定期的に声をかけていることで100%となった。 子どもたちのために使える時間を確保できていると肯定的評価する職員は、76.9%となった。ゆとりをもって、児童と外遊びしたり、話をしたりすることができないことがある。 	<p>4 4 4</p>	<ul style="list-style-type: none"> 小中連携を継続し、中学校の授業を小学校教諭が参観するなど学習内容の交流も行っていく。 幼保小合同研修も引き続き行い、幼稚園、保育所の学びと小学校の学びがつながるようなスタートカリキュラムを実施していく。 超過勤務45時間以内を目指し、仕事内容の効率化を図っていく。 時程の変更により、放課後に授業準備や教材研究ができているものの、児童と関わり合える時間を確保できるように仕事の優先順位を考えていく必要がある。
-----------------------------------	-----------	--	---	--	--	------------	--	---	--------------	---

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。